

坂本千明 紙版画家

今から三十年以上前、青森に暮らしていた高校生の私が、大学受験のために訪れた東京で自分に買った唯一の東京土産は『やんちゃブック』（天久聖一著/宝島コミックス）という単行本コミックだった。

初めて訪れた新宿の紀伊國屋書店で買い求めたもの。愛読していた雑誌に掲載されていた広告でその発売を知ったものの、地元の書店に並ぶことはないだろう本だった。数多ある東京銘菓に目もくれず、なかなかレアな選択をしたものだと思ながら思う。当の本人は大満足で帰郷し、受験のことも忘れ去り、嬉々として同級生に見せびらかしていた。

こんな風に私が欲しいと思う本は、大抵地元の小さな書店に「普通に」並ぶことはなかった。取り寄せをお願いしたり、都会の版元に直接通販を申し込んだり（とはいえ今みたいに通販サイトでポチッとできるはずもなく、現金書留や郵便振替を使う手間暇のかかる方法）、発売日から大幅に遅れて手に入るというのが当たり前で、今みたいに「フラゲ」なんてものもあろうはずもなかった。そんな生活を送っていた私にとって、書店で目当ての本を見つけられた喜びは大きかった。

さて話は八戸ブックセンターである。2021年、拙書『ぼくはいしころ』（岩崎書店）と『退屈をあげろ』（青土社）の原画展を開催して頂き、初めて訪れた。高校3年間通った八戸の街はすっかり様変わりしており、もはや私が知っているお店はほとんど無くなっていたけれど、八戸ブックセンターは街に馴染み、もう何年もそこにあるかのように感じられた。

半日ほど在廊して感じたのは、ただひたすら「羨ましさ」。話題の新刊がいくつも並び、逆に他所では手に入りそうにない地元の特化したZINEや、所縁のある作家の著作、専門書、古書までが販売されていた。それを読むためのスペースまで設けられ、更にはそこでコーヒーまで飲めてしまう。空いていればいつでも使えるというハンモックやカンヅメブースに面喰らいつつ、ふと見ればスタッフと読んだ本について長々と語り合っている学生さんまでいる。こんな書店、見たことがない。

もちろん建物の規模も、扱っている書籍の数も、大都市の大型書店とは比較にならない。でもそれが実に良い案配なのだ。かゆいところに手が届くともいうような本が「普通に」売られている。もし私が高校生の頃にこんな場所があったなら、放課後どれだけ通ったことだろう。

ギャラリーやイベントスペースを併設しているのも嬉しい。美術館でアート作品を鑑賞するのももちろん素晴らしいことだけれど、本を探しに行ったらたまたまやっていた企画展に思いがけなく心を

揺さぶられることもあるかもしれない。書店という誰彼問わず開かれた扉がそれを可能にしてくれる。

いつかまた展示を開催出来たら嬉しいし、機会があれば土地にちなんだ紙版画のワークショップも出来たらと勝手に妄想する。いやそれよりもまずは帰省がてらふらりと立ち寄り「そうそう、これ気になってたんだ」という本を手に入れたい。

坂本千明 chiaki sakamoto

紙版画家

『ぼくはいしころ』坂本千明原画展(2021)

青森県出身。東海大学教養学部芸術学科デザイン学課程卒業。著書に『退屈をあげる』(青土社)、『おべんとう たべたいな』『ぼくはいしころ』(共に岩崎書店)。松尾スズキ「人生の謎について」挿絵なども手がける。

